

発行年月：2014年2月



発行：日本医療ソーシャルワーク学会  
 (The Japanese Society of Medical Social Work)  
 編集：日本医療ソーシャルワーク学会 広報担当  
 印刷：社会福祉法人 福岡コロニー  
 事務局：〒675-0195 加古川市平岡町新在家2301  
 兵庫大学 生涯福祉学部 社会福祉学科 加藤洋子研究室  
 TEL&FAX：079-427-9955  
 U R L：http://www.jsmsw.jp  
 E-mail：jsmsw.secretariat@jsmsw.jp

## 第9号

## 日本医療ソーシャルワーク学会ニュース

## 目次

1. 学会長からの挨拶
2. 大会スケジュール
3. 岩手大会を終えて
4. 被災地ツアーの感想
5. 岩手大会の感想
6. 次回大会のアピール
7. 認定社会福祉士と認定医療社会福祉士との整合性に関する問題
8. 地区ブロック研修のお知らせ
  - ①広島
  - ②大阪
9. facebook開設のお知らせ
10. 会費納入のお知らせ

## 1. 学会長からの挨拶

日本医療ソーシャルワーク学会 会長 村上 須賀子(兵庫大学)

ちちをかえせ ははをかえせ  
 としよりをかえせ  
 こどもをかえせ

わたしをかえせ  
 わたしにつながる にんげんをかえせ

広島原爆詩人峠三吉の詩の一節が胸を突きました。大会行事の一環として陸前高田に赴き、かつての駅前ロータリーの位置に立ち、高く掲げられた一枚の写真を見せられた時によぎった衝撃です。ボランティアガイドの南さんが掲げた写真には、一番手前は「ハンコ屋」さんで、人々の賑わいが聞こえてきそうな駅前商店街が写っていました。今、同じ位置から視界に広がるのは草ボーボーの大地です。

人間も人間の営みも地域社会もまるごと奪われてしまったのだと、その無惨を感じ入りました。そして、広島で関わってきた被爆者たちの嘆きと重なり、今後の支援の長い道りを思いました。参加された32名の会員もそれぞれ、深い思いを心に刻まれたことでしょう。

今回の岩手大会は山館幸雄岩手県医療ソーシャルワーカー協会長の「一度、自分の目で見ることでしょ」との一言が契機となって実現いたしました。現場に立つ、当事者の言葉を第一とする、まさに「現場実践重視」という本学会のコンセプトを具現する大会企画となりました。「死」を見つめ、「生」と向き合うをテーマとした笹原留似子復元納棺師の特別講演は「当事者



の願いを組み込む、一緒に見守る、繋ぐ、寄り添う」など、ソーシャルワーカーと共有するキーワードが詰まった内容で、その臨場感に涙がふれました。「大規模災害とソーシャルワーク」の実践報告と合わせて学会誌に収録しておりますのでご一読下さい。

職場に帰った今も、私の脳裏にあるワンショットは「奇跡の一本松」です。全く個人的な感情ですが、海をバックに凜と立つその姿は愛おしく、そして、私たちの日本医療ソーシャルワーク学会のありようと重なったのです。私たちMSWは医療の職場では少数職種で孤独ですが、ソーシャルワーカーとして凜と立っていない場面、荒波にもまれても立っていない場面があります。陸前高田の案内役を担って下さった沼田ワーカーは「親や子や家や、多くを奪われ打ちひしがれた人々がそれでも生きて行こうとする、その時、奇跡の一本松は、希望の一本松になったのだ」と教えて下さいました。日本医療ソーシャルワーク学会がMSWたちの希望であり続けたい、私にその意を強くさせたワンショットなのです。

## 2. 大会スケジュール

会場：岩手県県民情報交流センター「アイーナ」  
〈1日目〉10月13日(日)

特別講演

『「死」を見つめ、「生」と向き合う』

講師：復元納棺師 笹原 留似子 先生

リレートーク

「そのときあなたは どうする～大規模災害とソーシャルワーカー～」

コーディネーター：兵庫大学看護学部教授 竹内 一夫

1) 協会の被災時の状況と支援活動に関する調査報告

岩手県医療ソーシャルワーカー協会 社会活動部会

2) 被災地の状況と今後の課題について

社会福祉法人典人会専務理事 内出 幸美

3) 被災地のMSWの活動について

石巻赤十字病院 MSW 八嶋 浩



学会発表

座長：福岡医療福祉大学人間福祉学部教授 大垣 京子

① Mapping技法を用いた地域協働支援の一事例

愛媛県立中央病院 畑中 眞優子

② 退院支援に求められている療養生活上の援助

広瀬病院 梶平 幸子

③ MSWの退院後のモニタリングについて～退院支援調査データからの一考察～

早良病院 安武 一

④ MSWに求められていることとは～改めて業務指針から振り返る～

南昌病院 榎田 直希

⑤ 岩手県こころのケアセンターの活動について

岩手県こころのケアセンター 佐々木 紀子

⑥ 現任者によるグループスーパービジョンの取り組み  
岩手県立中央病院 千澤 美樹

⑦ 当センターの家屋調査(ケア会議を含む)における医療ソーシャルワーカー(MSW)の関わりについて  
いわてリハビリテーションセンター 市村 里奈

⑧ がん相談支援とリエジエンスー支援プロセスと成果に着目してー  
東京医科大学病院 品田 雄市

〈2日目〉10月14日(月・祝)

学会調査報告・学会研究報告、ワークショップ

①

1) 学会調査報告：「退院支援について」

報告者：加藤 由美(東北文化学園大学)

2) 学会研究報告：「医療ソーシャルワーカーの養成研修について」

報告者：横山 豊治(新潟医療福祉大学)

② ワークショップⅠ

「ケア会議(カンファレンス)場面でのMSWの発言力」

リーダー：杉田恵子(社会福祉法人医真会 医療福祉科管理科長 杉田 恵子)

③ ワークショップⅡ

「効果的な入院相談の方法

～あらためて『入口』を考える～

リーダー：中居 倫子

(盛岡医療生活協同組合川久保病院 MSW)

吉田 利春

(医療法人社団帰厚堂 南昌病院 MSW)

④ ワークショップⅢ

「介護老人保健施設の支援相談員の課題とスキルアップ」

リーダー：畑中 良子

(元介護老人保健施設 あおぞら 支援相談員)

戸村 淳一

(介護老人保健施設 博愛荘 支援相談員)

⑤ ワークショップⅣ

「心理教育」

リーダー：高森 信子(心の相談員)

### 3. 岩手大会を終えて ～よくおでんした～

岩手県医療ソーシャルワーカー協会 会長 山館 幸雄

低気圧の通過に伴う秋冷な気候の中、日本医療ソーシャルワーク学会岩手大会によくおでんした(よくぞ来ていただきました)。

10月12日(土)には、陸前高田市への被災地ツアーに県外参加者の8割を超える30名以上の方にご参加いただきました。今回の震災を風化させてはならないという我々の思いをくんでいただき感謝申し上げます。

それに引き続く初日の笹原留似子さんの講演もご好評いただきました。なぜ、医療ソーシャルワーク学会で復元納棺師の



講演なの?と疑問に感じていた方も、人を支援するというソーシャルワークとの共通点、「なるほど」と感心していただけたのではないかと思います。

その後のリレートーク、学会(研究)発表、ワークショップなどを通して、医療ソーシャルワーカー(MSW)の持つ「強み」を考える機会としました。MSWは、患者・家族の思いを受け止め、療養生活のために人と人および社会資源をつなぐことに長けています。また、MSWは入院前から退院後まで(場合によっては亡くなった後も)関わる職種であり、MSWの持つ価値、視点を実践現場で生かすことの大切さを再認識していただけたら幸甚です。

それでは来年、東京大会でお会いしましょう。

### 4. 被災地ツアーの感想

#### ①陸前高田市被災地見学に参加して

畑中 眞優子(愛媛県立中央病院)

人が死を受容する瞬間というのは、遺体に触れた瞬間にはじまる。災害被害者のご遺族のため、復元納棺師として生前の姿を取り戻し、別れを見送るボランティアをされた笹原氏から「死に携わる専門職として絶対に逃してはならない言葉がある」ことを教わった。受容は、未来を変えていくことだけでなく、「過去も変えることが出来る」というご遺族の言葉



を心に留めた。

現地では、優しい花畑に迎えられた。道を進むと、流木や土が積み重なっていた。震災後間もなく伺った宮城県石巻市と比較すると、瓦礫が無くなっていること自体、復興に近づいている証であるのだと解釈しながらも、鳴り響く工事の音と、何も無いからこそ吹き乱れる強風から、想像以上の災害であることを痛感した。

ガイドの方から「いつどこで起きるか分からない。どうか身構えて欲しい。危険な時に判断する術を知って欲しい」と繰り返し教わった。同じ苦しみに遭わないために、「伝える」使命を果たしておられる姿であった。

私には何が出来るのだろうか。それ以上に、支援者のスタンスが、被災地の方々の尊厳を壊してしまわないだろうか。尊厳も守りたい。「神様、お父さんの友達なんですよ」。棺を覗き込んだ子どもたちの勇気、壊されずに残る家。教わった強さを伝えたい。今を知ることで生まれた思いを心に残した被災地見学であった。

## ②【命をつなぎ、命を受け継ぐということ】 ～被災地ツアーに参加して思うこと～

藪上 龍介(中央法規)



『35分間』——ひとつ、ふたつと数えて2,100秒の間——それは、地震が発生してから、津波が到達するまでの時間。東日本大震災、このわずか35分間に人々の運命は大きく分かれたのだという。



「35分間があったから、救われたたくさんの『命』がありました——」

地震発生から急いで高台に逃げて、どうにか助かった家族。みんなで力を合わせて、屋上まで上がり、救助を待った市庁舎の職員。煙突を抱いて、波が襲いかかる様をただ見つめていたという男性。それは全て、この35分間があったから、助かった命だった。

「でも、この35分間があったから、助からなかった『命』もあったのです」

それは、この土地に長く暮らす高齢の方々。地震の多いこの地域で、津波警報は日常化していたという。このときも地震発生から30分が過ぎて「もう大丈夫だろう」と、一度避難をした後で家に戻ってしまったのだ。それは「津波は地震発生から30分以内にやってくる」という、これまでの体験に基づいた行動だった。これだけの大地震が発生してもなお、その地に住む方々にとって津波は、ごく日常の中にあったことが分かる。

体験を生活に活かしていくことは何よりも大切なことだ。でも、わずか2,100秒の運命の分岐点。僕たちはその分岐点に気づくことができるのだろうか。

2013年10月12日(土)、快晴。この日は岩手大会のプレ企画、陸前高田市への被災地ツアーだった。

13:00、盛岡駅でバスに乗り込み、2時間半かけて陸前高田へ。バス内で被災地の「いま」を聞きながら、長い道のりを被災地に向けて走った。山道を走って走って、僕たちの目前に広がってきた景色。

『岩手の湘南』と呼ばれていた、美しい海岸線。青い空。波

に反射して、キラキラ輝く陽光。そして、がらんと広がった空き地。ダンプカーが走って巻き上がる土砂。建物も瓦礫も「何もない」場所——その光景を見たとき、僕は最初、何が何だか分からなかった。……「被災地に行く」途中、僕らはいま、どこにいるんだろう、と。

自身も被災者であるガイドさんの説明を聞いて初めて、その場所が津波ですべてが流された「駅前商店街」の跡地だと知った。……その瞬間、首の後ろを激しく殴られたような激しい衝撃を受けて、僕はうろたえた。手足がぶるぶると震えた。

阪神淡路大震災で被災した自分自身の体験、TVで何度も見た大津波の被害、被災された方のお話、たくさん本も読んだ。そんな風にして「知っている」つもりでいた自分。僕はなんて愚かな馬鹿者だったんだろう。

この場所には、街があり、家があり、信号があり、お店があったのだ。——津波は、なんて残酷な災害なのだろう。人々の深い深い悲しみ。この「がらん」とした空間が、その恐ろしさを語る。

「津波は白い壁、なんて表現をよく聞くのだけれど」と、ガイドさんは言う。

「それは白い壁なんてもんじゃなかった。海底からの泥やゴミ、土砂を大量に含んだどす黒い大きな壁。それはすべてをなぎ倒し、より“黒く”なりながら、街を、家を、人を、家族を、そしてたくさんの希望や想い、この場所の一切合財を飲み込みました」

「復興、と人は言うけれど、正直なところ、どのように立ち



直っていけばいいのか分からないのです」積み上げられた瓦礫の山にそっと目を向けて、ぼつりと話すガイドさん。

「津波で塩分を含んだ土地は、そのままでは建物は建てられない。大量の瓦礫も洗浄してからじゃないと処理できない。住



居の問題、土地の問題、防災の問題。流されて草地になって、住民は自分の家がどこにあったのかさえ分からないのです」

——言葉が出ない。僕たちには、何もできないのだろうか。無力な自分が悔しくて、恥ずかしくて、僕はただ下を向くしかなかった。震災から2年半の月日が過ぎても、被災された方々の胸にはいまも痛みが残る。それは傷痕ではなく「いま」もありありと見える確かな痛みであった。

「でもね」と、ニコリ笑って、彼女は話す。

「私たちは、前を向いて歩いていきます。それが残された私たちに出来る大切な一つ、なのです」

『支える』なんて、偉そうなことは言えない。正直、僕には何

の力もない。知識もない。技術もない。でも今回、僕は知ることができた。被災地のいまと、被災された人々の思いを。

盛岡駅へ戻るときに見えた、奇跡の一本松。その凜とした佇まいは、僕らにたくさんのことを教えてくれる。

僕たちは、生きなければいけない。生き抜くのだ。迷わない。忘れない。

——命をつなぎ、命を受け継いでいくこと。

それこそが、大きな災害の教訓として、僕たちがずっと伝え続けていかなければいけないことなのだ。



## 5. 岩手大会の感想

### ①岩手大会に参加して

山川 敏久(東北福祉大学)

岩手大会に係った会員の お・も・て・な・し に、まずは深く感激いたしました。

プログラムも、現任者が明日から実践できる、わかりやすく役に立つ内容であったとともに考えさせられる内容であったと思います。

リレートークでは、東日本大震災においてソーシャルワーカーが幅広く活動、経験した役割や、連携など、私たちに、示唆や教訓を与えてくれるものであり、その時の、辛さ、悲しさ、苦しさ、そして喜びなど、あらためて身が引き締まる思いの素晴らしい内容でした。

学会発表は、事例報告、調査分析、業務分析、活動報告など、現実的な実践の取り組みであり、すぐにも活用できる発表であり、明日に繋がる有意義な内容でありました。

2日目は、学会調査報告・学会研究報告、ワークショップが

あり、私は、学会調査報告・学会研究報告に出席しました。退院支援研究事業における実態調査についての報告は、医療ソーシャルワーカーが、退院支援において専門職として築き上げてきたものを、明確に分析してあり、あらためてエビデンスとなり得るものと確信できると感じました。また、医療ソーシャルワーカーの人材養成については、教員として大学で教授すべき多くの指示をいただきました。医療ソーシャルワーカーを養成する者としてとても収穫のあった学会でありました。



## ②第4回日本医療ソーシャルワーク学会岩手大会を終えて

阿部 邦子(盛岡赤十字病院)

今大会は東北の地、岩手に120名を超えるソーシャルワーカーが参集し、全国の仲間との再会の喜びを分かち合う場となった。

さらに東日本大震災から2年半が経過し、復興も各地域で差はあるにせよそれぞれの形で進んできている現状を見てもらいたいと、プレ企画として陸前高田への被災地ツアーをおこなった。学会前日、半日だけの短い時間ではあったが、その分凝縮されて参加した方々の心にしみ込む内容だったのではないだろうか。

翌日の学会での笹原さんの講演や引き続きおこなわれたリレートークも陸前高田の現地を見たからこそ「わかる」「共感できる」といった声も多数聞かれ、被災地で開催した意義を改めて感じた。震災を経験したものが伝えたいこと、被災地のソーシャルワーカーとして今後やるべきことが見えてきたといえる学会であった。



## 6. 次回大会のアピール

### 第5回日本医療ソーシャルワーク学会 東京大会のご案内

藤平 輝明(東京医科大学病院 総合相談・支援センター)



来年2014年9月27日と28日の二日間、東京大会の開催を準備しています。会場は東京医科大学病院および周辺施設です。

社会保障審議会国民会議報告が今年の8月出され、日本の社会保障・社会福祉が大きく変わってしまう危機感があります。自助・

共助・公助の意味するものは何なのかを共に考えていければと思います。

また、来年の診療報酬改定は、少子高齢化のピークの2025年を見据えた改定であり、7対1看護の再検討、病棟単位申請、病床機能報告制度がはじまります。そして消費税8%の時代になります。日本医療ソーシャルワーク学会の設立呼びかけ文にあるように、より望ましい社会の変革者としての実践をめざす一助になればと思います。大会テーマ等はこれから東京大会実行委員会を立ち上げて、討議して行きます。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

## 7. 認定社会福祉士と認定医療社会福祉士との整合性に関する問題

教育主担理事 横山 豊治(新潟医療福祉大学)

筆者はかつて、「認定社会福祉士制度をめぐる動向と課題」(新潟医療福祉大学社会福祉学部編『社会福祉の可能性』相川書房、2011年所収)と題する論文において、認定・認証のしくみが第三者機関によって構築されようとしている途中で、日本医療社会事業協会(現日本医療社会福祉協会)が、そこで予定されているのとまったく同じ「認定社会福祉士」の名称を先に使って独自の認定制度を始めたことが将来、混乱を招くのではないかと危惧し、その問題点を指摘していた。両制度の認定要件があまりにも違い過ぎたからである。

今般、東京都医療社会事業協会(以下、東京都協会)から発行された『東京MSW』324号(2013.9.15)に、「認定医療社会福祉士制度の動向について」という会員向けの告知記事が掲載されたことを知った。それによると、「社会福祉士専門職の認定制度が出来る過程で、当初伝えられていた日本医療社会福祉協会が認定する『認定医療社会福祉士』と日本社会福祉士会主導の「認定社会福祉士認証・認定機構」が認定する「認定社会福祉士」とが、一体化され、読み替え可能になるということは、2つの団体が協議した結果、認定要件等が違うため、一体化が不可能になり、ポイントも読み替えされないことになりました。以上のように2つの認定制度が一体化されないことが決定しましたので、当協会のポイント申請した研修は、あくまで『認定医療社会福祉士』の申請時のみに有効となります。」(傍点と下線は原文のまま。文中の「当協会」は東京都協会)ということである。

東京都協会がわざわざ下線まで引いて強調しているのは、同協会が実施した研修ポイントを含めて日本医療社会福祉協会(以下、日本協会)が創設した「認定医療社会福祉士」の認定要件を満たし、申請を行おうとする会員の中に、その認定を受けておけば「認定社会福祉士」の認定も受けられるだろうと期待していた者がいる可能性を考えての注意喚起といえる。これは、他県のMSWにとっても重要な問題で、日本協会が独自の認定制度を始める際に会員に説明していたことが大きく変質し、2010年5月の長野総会でこうした事態が起きるのを懸念する声に対して当時の会長が「ご懸念には及ばない」と断言していたことが反故にされたに等しい。もともと、同総会の時点

では「認定社会福祉士(医療分野)」という名称で認定制度をスタートさせ、医療分野で2つの認定制度ができることはあり得ないと言っていたものが、第1期受付分の認定を実際に行う段になって認定社会福祉士認証・認定機構が行う認定社会福祉士制度との調整がつかず、あらためて総会に諮ることもなく「認定医療社会福祉士」という名称に変えたところで既に「話しが違う」という事態に陥っていたわけだが、日本協会は、2013年5月の大阪総会においても、「認証・認定機構の認定社会福祉士制度との整合性を図る」「認定医療社会福祉士から認定社会福祉士(医療分野)への道筋を確保した」(2013年度社員総会議案書p.6)としているように、両制度間の整合性を図るという方向性を会員に示し続けてきたことが問題をより拡大させつつある。実際に、「道筋を確保」されたのは、日本協会が2010年度から2011年度にかけての経過措置として認定した第1期、第2期分の「認定医療社会福祉士」計230名だけで、その人たちがさらに「みなし研修」と呼ばれる研修を受けた場合に、認証・認定機構に「認定社会福祉士(医療分野)」の認定申請を行える—というルートが認められたに過ぎず、同機構としては、こうした経過措置の適用もそこまで限っており、以後は認めないとしている。(2013年10月17日に筆者が同機構事務局より確認)

こうなると、「認定医療社会福祉士」と「認定社会福祉士(医療分野)」は、この先どこまで行っても別物ということであり、長野総会で「もしこれが将来、2つ別々に走ってしまうと会員がどちらの認定を受けるためにもかなりのお金と時間を使わなきゃいけない。相当会員に影響が及ぶ」と危惧していた会員の声は現実のものとなり、当時の会長が「それはあり得ない」と断言していた日本協会の組織的な責任は非常に重いと言わざるをえない。特に、日本協会の認定制度は、同協会に未入会の都道府県協会会員などでも申請・認定が可能としていたことから、総会の議決を共有していない日本協会会員外の各地のMSWにも影響は波及するおそれがある。都道府県協会の代表者による「会長会」などでも、この問題は真剣に議論されるべきであろう。

## 8. 地区ブロック研修のお知らせ

### ①中国地区研修会 in 広島

テ ー マ：「MSWのための解決構築」  
講 師：大垣 京子 先生  
（福岡医療福祉大学 人間社会福祉学部 教授）  
開 催 日：平成26年3月2日（日）  
時 間：10：00～16：30（受付9：30）  
会 場：アステールプラザ4階  
（広島市中央区加古町 4-17）

### ②関西地区研修会 in 大阪

テ ー マ：「スーパービジョン」  
講 師：竹内 一夫 先生  
（兵庫大学 健康科学部 看護学科 教授）  
開 催 日：平成26年3月16日（日）  
時 間：10：00～16：30（受付9：30）  
会 場：エル大阪3F 文化プラザ  
（大阪市中央区北浜東3-14）

問い合わせ：早良病院(092-881-0735)

## 9. facebook開設のお知らせ

日本医療ソーシャルワーク学会のfacebookがオープンしました。

研修会の案内や報告などをいち早く会員の方にお知らせします。ぜひ、お気軽にご覧下さい。



「日本医療ソーシャルワーク学会facebook」で検索

## 10. 会費納入のお知らせ

平成24年度より、年会費が5,000円となっております。お間違えないようお振り込みください。

○過年度分の年会費納入がお済みでない方がいらっしゃいます。

お急ぎお納めくださいますようお願いいたします。

郵便振込口座記号番号：01760-2-140617

加入者名：日本医療ソーシャルワーク学会

納入の際は、通信欄に「平成〇年年会費」とご記入ください。

財政的に、厳しい状況での学会運営となっております。

学会事業推進のため、皆様のご理解・ご協力よろしくをお願いいたします。

お問い合わせ先：日本医療ソーシャルワーク学会 事務局（竹内・森崎）

e-mail: takekazu@hyogo-dai.ac.jp Fax: 079-427-9928

### 《編集後記》

「一緒に悲しむことよりも、あなたの仕事を一生懸命にやってほしい。それが沿岸を、岩手を元気にする力になると思うから」復興の狼煙ポスタープロジェクトより 岩手大会で語られた言葉を聞いて、自分は東北のために何ができると一人ひとりが問われたと思います。しかし上記の言葉は、「あなたはあなたの岩手を探さない」として「今いる現場で頑張りなさい」と私たちを励ましてきています。私たちが目の前にいる患者さんに真摯に向き合い一生懸命支援することが、岩手が元気になる力となることを信じます。 （広報 中村勇気）